

味覚を表現することばの象徴性と動機づけ

By What are the Expressions of Tastes Symbolized or Motivated?

福島 宙輝*1

Hiroki Fukushima

*1慶應義塾大学 政策・メディア研究科

Graduated school of Media and Governance, Keio University

1. 大見出し

味わいを表現することばの背景には、どのような認知的営みがあるのか。味わいという対象に対して、どのような心的表象を描き、どのような知識を持っていて、どのような記憶を想起し、どのような領域を起点領域として想起して言語記号に結びつけているのか。このような問いが味覚表現の動機づけに関する中心的な問いとなる。

本稿では、まず味覚の言語表現が直接表現と類推表現に分類可能であること、そして両者が連続的關係にあることを示す。その上で味覚の類推表現において参照点構造が機能することを主張し、参照点として用いられる知識の枠組み、情報群を、「中間参照枠」として提唱する。最後に、中間参照枠としての機能を持つと思われる音象徴語、形による象徴現象を検討することにより、言語学分野から味覚の認知過程を明らかにする研究の実践例を示す。

2. 味覚を表すことばの分類

2.1. 味覚表現への言語学的アプローチ

味覚表現に対する言語学的アプローチは、瀬戸ら[03; 06]を嚆矢と見ることができる。瀬戸らは味わい表現を書籍、広告、雑誌等の幅広い言語資料から収集し、それらを「味ことば分類表」とし、味わい表現においてメタファー表現が重要な位置を占めることを示した。瀬戸らは、味の表現は常に「ことば不足」であり、ことばの供給源を本来の味ことば以外のものに求める必要があるとした上で、他の感覚からの表現の借用、とりわけ共感覚表現が味覚表現の一大供給源となっていることを指摘している。

瀬戸らの研究は、認知言語学的視点から味わい表現を分類、整理したものとして重要な研究である。しかし味覚の認知過程、記号過程という点を考える上では以下に示す二点への考慮が必要と思われる。

(1) 味わい表現における語の意味の対象依存性

まず一点目として、瀬戸らは雑誌、書籍等の幅広い言語資料から表現の事例を収集している。これは一種のコーパスとみなすことができ、コーパスである以上、一般には網羅的であることや、代表性を担保する質量が望まれる。しかし味覚表現に関しては、例えば日本酒とワインなど、異なる対象への表現を字義的に同一平面上で扱って良いのかという問題が生じる。これはとりわけ味わいの表現におい

ては、語の意味が対象に強く依存するためである。音象徴語などには顕著であるが、語の意味が内包的に定義されず、周辺語との共起関係によって規定されるという現象は、対象を限定しないコーパスの分析から明らかにすることは困難であると思われる。あるいは日本酒の「ふくよか」という語が「米の旨みを思わせる香りが柔らかく広がる様子」を示すように、ある語が特定のコミュニティにおいて専門用語的に対象依存性を持つことがある。こうした語の多義性をどのように扱うかは言語を扱う研究では避けられず、研究の目的、指向性の問題であるが、とりわけ味覚の表現において意味の対象依存性は十分に考慮される必要がある。

(2) 直接表現と類推表現は個人内において連続的である

二点目として、瀬戸らの表現分類は字義的な表現上の分類であり、実際の表現過程を反映した分類ではない点を挙げることができる。例えば日本酒の利き酒においてある香りを「カブロン酸エチルの香り」と指摘すれば直接表現だが、「リンゴの香り」と表現するとメタファーだということになる。プロのテイスターの表現過程、すなわち「酢酸イソアミルではなくカブロン酸エチル、すなわちリンゴの香り」という直接的な表現過程と、アマチュアの「なんとなくフルーツで言うところのリンゴみたいな香り」というメタファー的な表現過程は、字義的には同じでも、内的な表現過程としては異なるものとみなすべきである。

この例を踏まえると、ある表現がメタファー的表現過程を経たものかどうかは表現者の熟達の度合いによって異なっていることが分かる。従って直接表現とメタファー表現（類推表現）は、瀬戸らの分類にみられるように字義的に明確に区分されるものではなく、表現者の内部での記号と感覚の接続の度合い（すなわち記号接地[Harnad 90]の度合い、あるいはentrenchment[Taylor 12]の度合い）によって勾配があるとみなすべきである。

2.2 味覚の直接表現

類推表現とグラディエントであることを前提とした上で、味覚の直接表現とは、感覚と表現記号が明確に対応している表現と考えることができる。代表的なものとしては「五味」とされる「甘い、しょっぱい、旨い、酸い、苦い」という表現であり、これらは味蕾の活動に対応している。基本味ではなく複合的な味（たとえばコク）、あるいは受容器は味蕾ではないものの味覚と同じように味わいとしての表現が対応している「辛い、渋い」なども味覚の直接表現と考えることができる。

2.3 味覚の類推表現

目で見たものの名前を言い当てるのが容易いのに対して、味わいの要素や全体像を言い表すことは困難に思える。このときに活躍するのが、先掲の瀬戸も指摘する通りメタファー表現、類推表現である。類推によって味わいが表現されるのは、直接表現の語彙数が限定的であることに加えて、味覚あるいは嗅覚によって得られる情報の認知的な際立ちが小さいことが主要な動機である。

典型的な味わいの類推表現としては「リンゴのような香り」「ほんのりした香り」などのオノマトペ（音象徴語）も類推表現とみなすことができる。

[浅野 14]は、化学受容感覚である味覚や嗅覚、接触感覚の触覚に関しては、表象（典型的には言語表象）を通じた対象認知が必ずしも生じるわけではないことを指摘し、視覚に比べて言語記号との親和性は低いが、オノマトペのような身体感覚的な要素を持つ語との関連が深いことを指摘している。

2.4 味覚表現における参照点構造の利用

認知言語学分野では、多様な部分構造を含む概念構造において認知的な際立ちの小さい情報構造にアクセスする際の方略として、参照点構造の利用が指摘されてきた[Langacker 90]。参照点とは、ある事物との心的接触を果たす目的で、別の事物の概念を想起する行為において、最初に想起される構造であり[Langacker 93]、この参照点を利用する人間の基本的な能力を参照点能力と呼ぶ[辻編 13]。単純な例では、公園にたくさんの子供がいるときに「木の下の子」と言うように、木を参照点として経由し、特定の女の子を指示するという表現である。

本稿では、味覚の表現においても、この参照点構造が表現方略として用いられていると考える。ただしこの際参照されるのは特定の味の要素ではなく、例えば「ヨーグルトのような香り」、「色で言うと黄緑色」のように、フルーツや他の食べ物、色、形、音など、他のドメインやモダリティの情報である。こうした味覚表現において類推のソースドメインとして参照される知識の枠組み、情報群を、「参照枠(referential framework)」とする。

この参照枠の特性として、言語記号としての抽象性や恣意性をもたない、すなわち身体感覚に動機づけられた知識である点が挙げられる。この、感覚と言語を媒介的に接地させる性質（中間性）を踏まえて「中間参照枠(inter-referential framework)」と呼称する。

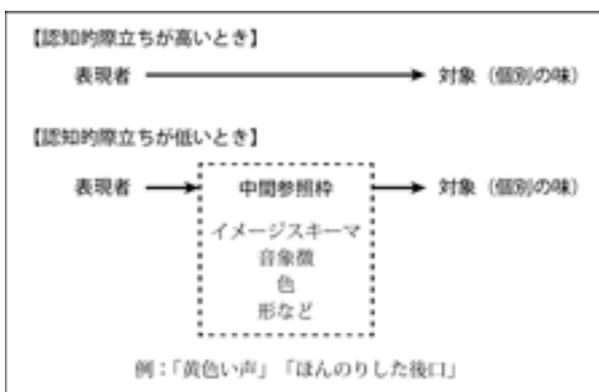


図 1: 中間参照枠

2.4 中間参照枠

ここでいう中間参照枠は、状況依存的、文脈依存的な性質を持つため厳密に定義することはむずかしいが、以下、その特徴を示す。

中間参照枠は、身体感覚、感覚情報に動機づけられた iconic な記号の知識構造である。外延的な定義として具体的には、(マルチモーダルな)イメージ図式、概念メタファー、共感覚、音象徴、色による象徴、形による象徴などが含まれる。この点においてこれまで主に認知科学において身体性の文脈で議論されてきた「わざ言語」[生田&北村 11]や、メタ認知による身体感覚の言語化[諏訪&赤石 10]などの概念と親和性が高いと考えられる。

中間参照枠は、味覚表象のように認知的際立ちの小さい情報にアクセスする際、あるいは知覚できる情報そのものが少なく焦点化が困難な際に、類推表現のソースドメインとして機能する。この際、ソースドメインを経由してターゲットドメインに至るという参照点構造を提供する。何が中間参照枠として利用されるかは、文脈や対象、個人の認知能力に強く依存する。中間参照枠としての知識は、その場限りの表現として、限定目的的に用いられることが多い。しかし例えば語彙としてのオノマトペのように、より精緻化され概念化あるいは事例化されるとその意味が個人間で共有できる可能性が高まる(社会的な entrenchment [Taylor 12])。

3. 中間参照枠としての音象徴語の使用原理分析

3.1 味覚表現における音象徴語の機能

[福島&田中 16(投稿中)]では、ワインと日本酒の味覚表現コーパスの分析により、音象徴語の使用原理に関して以下の知見が得られた。

まずワインのコーパスからは、味ことば分類における場所や作り手、製造プロセスなどの「状況表現」に含まれるようなもの、または価格などの定量的な要素は、音象徴語によって表現される頻度が低いことが示された。この傾向は、語は少ないものの日本酒においても確認された。

一方、日本酒、ワインに共通して音象徴語を含む文に頻度が高かったのは、味ことば分類表における「食味表現」であった。この点に関して、ワインコーパスからは、個別具体的な味の要素ではなく複合的な食味表現が共起しやすいことが示された。日本酒コーパスの分析からは、食味表現の中でも口に入ってから時系列で言うならば「最初と最後」、すなわち味が感じられる瞬間や現れる様子、そして喉を通るさまやその後の口中の感覚を表現するために音象徴語がより重点的に用いられることが示された。

3.2 中間参照枠としての音象徴語の機能

音象徴語は副詞であるため、音を参照点として音象徴語で表現されるものは、味わいの要素ではなく属性であると考えられる。日本酒では、味わいの中でも香りの「現れ方」や「消え方」により強い共起が示された。日本酒の基本味である甘味、旨味、酸味、苦味、渋味、あるいは基本的な香りとしてのリンゴやバナナ、メロンといった語はどれも有意差が検出されなかったことは、実際に際立って感じられる味の要素には音象徴語は必要とされない、すなわち参照枠を経由せずとも記号接地(感覚と言語を繋ぐこと)が可能であることを示している。「そこにある味」に対して「出てくる味」や「消えていく味、その消え方」の

暗黙性が高いことは明らかであり、その暗黙的であいまいな感覚を表現するために、参照枠として音象徴語が用いられたものと考えられる。

4. 形による象徴

中間参照枠のターゲットドメイン（目標領域）となるものは、味の要素、属性に加えて、味の要素間の関係性が考えられる。味わい表現において味の要素を示すものは名詞が一般的であるが、味の要素間の関係性を示す働きは日本語では主に動詞にある。本項では、味わい表現における動詞表現を図式として描画する試み[福島 13]を示し、形による味わいの表象を考察する。

[福島 13]では、日本酒味覚表現コーパスから抽出した動詞をKJ法によって各語が表す味わいのイメージによってクラスタリングし、26のクラスタを得た。そして、それぞれのクラスタの内部の動詞に共通のイメージを二次元の図式によって描画した(図2)。

十分な実験量は得られていないものの、この図式を用いた予備の実験によって、同一の日本酒に対して複数人が同じ図式を選択するという現象も観察されている。その程度には検証の余地があるものの、こうしたイメージ図式にも一定程度味わいに対して象徴性があるものと考えられる。

5. おわりに

認知言語学の一大テーマは、「言語使用には人間の認知能力が反映されている」というものであり、言語使用を分析することによって人間の認知能力の一端を明らかにすることが可能というものである。言語研究において大きな位置を占めるコーパス分析は、例えば日本語でどのように味覚が表現されるか、どのようなメタファー表現が見られるか、メタファー表現において起点領域となりやすいものは何か、といった問いを可能とする。本稿で示した中間参照枠としての音象徴語、形象徴、イメージスキーマの例も、味覚コーパスの分析によるものである。

しかし、さらに低次元認知情報と言語記号との関わり、すなわち具体的にどのような味わいに対してどのような表現を用いているかといった点や、日本語全体の傾向性ではなく、各個人がどのように味わいを表現するかといった点はコーパス分析からは明らかにならない。今後の研究課題としては、例えば形表象の実在性を検証するために、味覚センサやfMRIなどの測定値と、描画法による描画との相関関係を明らかにする試みなど、より低次元の認知情報、および感覚と記号との接続を明らかにする実験手法をデザインすることが求められる。

日本酒味わい図式 Nihonshu Ajiwai Chart

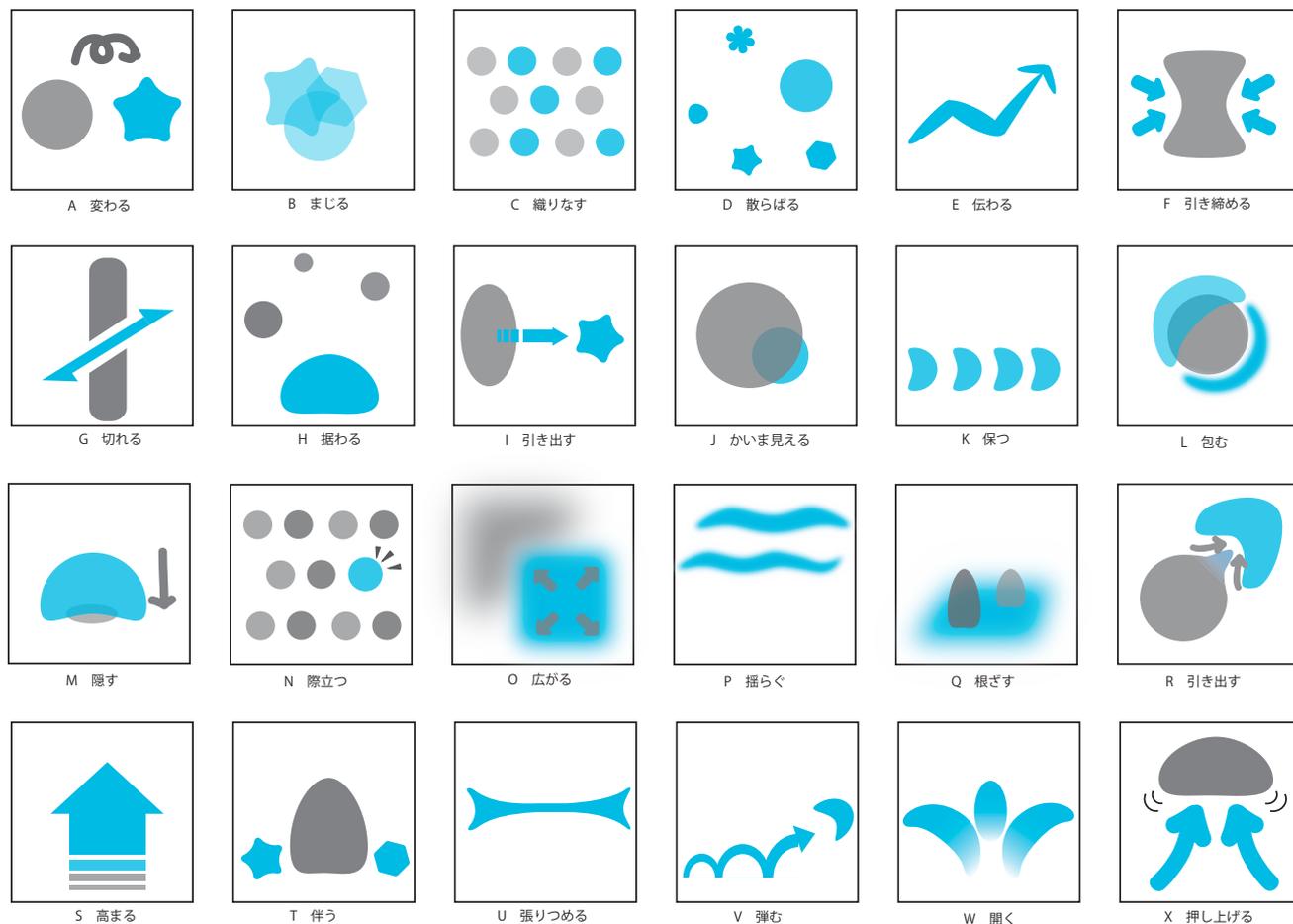


図2

参考文献

- [浅野 14] 浅野倫子:知覚と言語,(言語と身体性,今井むつみ & 佐治伸郎 編),pp.63-91 (2014).
- [福島 13] 福島宙輝:味わいの言語化を支援する 「日本酒味わい関係図式」 の提案. ことば工学研究会: 人工知能学会第 2 種研究会ことば工学研究会資料, Vol.44,pp.1-4 (2013).
- [Harnad 90] Harnad S:The symbol grounding problem. *Physica D*, Vol.42,No.1,pp.335-346 (1990).
- [Langacker 90] Langacker Ronald W:Concept, image, and symbol-the cognitive basis of grammar. Berlin: Mouton De Gruyter, (1990).
- [Langacker 90] Langacker RW:Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics (Includes Cognitive Linguistic Bibliography)*, Vol.4,No.1,pp.1-38 (1993).
- [瀬戸 03] 瀬戸賢一:ことばは味を超える : 美味しい表現の探究. 海鳴社, (2003).
- [瀬戸ら 05] 瀬戸賢一編著, 山本隆, 楠見孝, 澤井繁男, 辻本智子, 山口治彦, 小山俊輔: 味ことばの世界. 海鳴社, (2005).
- [生田&北村 11] 生田久美子, 北村勝朗: わざ言語 : 感覚の共有を通しての「学び」へ. 慶應義塾大学出版会, (2011).
- [諏訪&赤石 10] 諏訪正樹, 赤石智哉: デザイン学 身体スキル探究というデザインの術. *認知科学*, Vol.17,No.3,pp.417-429 (2010).
- [Taylor 12] Taylor JR:The mental corpus: How language is represented in the mind. Oxford University Press, (2012).